



家では読まへんけど、
ここでは読みたいくなる!

図書室の魅力

公立小学校 学校司書

「4時間目に行くしな!」「私は3時間目やで!」休み時間に廊下で子どもたちと出会うと、よくこんな声をかけられます。週に1回ある図書の時間をみんな楽しみにしているのです。小学校に図書館司書として勤務している私には励みになる語りかけです。その言葉から、子どもたちが読み聞かせの本を心待ちにしているだけでなく、好きな本を選んだり、カーペット敷きに上がり込んで、ギネスブックや探し絵本などを友だちと一緒に見たり、学校図書室ならではの魅力を満喫しているように思えます。「帰りたくないな。いつまでもここにいたいな」「家では読まへんけど、ここでは読みたいくなる」という声もよく聞きます。場所のもつ効果とでもいうのでしょうか。保健室とはまたちがい、子どもの日常の心の安定を保つ場所として図書室はあるのかも知れません。

私の勤務地の小・中学校には学校司書が1校1名配置されていますが、非常勤の職員です。勤務時間が限られているため、どこまで仕事を拡げるか悩みのタネです。公共図書館に本を借りに行ったり、ブックトークのプログラムを組み立てたりするのは、勤務時間外になってしまうことも多いです。有志の研修会は勤務外で開催しています。

限られた時間のなかで、日常の開館、図書の時間(授業)、図書館だよりの発行、本の選定、教師への教材支援や児童の調べ学習の支援、図書委員会指導、など多岐にわたる仕事をしています。やはり、いつでも図書室に司書がいる状態を実現して、しっかり図書館活動にとりくめる条件がほしいです。



ちいさなきっかけを いかして

県立高校 学校司書

たくさんの本
を用意してもらって
スムーズに調べ
学習ができました



福島県の山の中にある高校。野鳥の音が響くなか、朝から晩まで生徒たちが坂道を走る体育会系の本校では、図書館はひっそりとした場所でした。

しかし2年前、ある数学の先生が「本を読めば集中力がついてスポーツの成績も上がる」と力説されたことがきっかけで、生徒がたくさん来館しました。この機に「何かお探



しですか」と声をかけ、「大丈夫です」と断られたらそこはそっとしておいて、「泣ける本ありますか」と聞かれれば、司書の脳内「泣ける本リスト」からどんどん紹介します。図書館だよりの発行回数を2倍にしたら「昨日見た図書館だよりのあの本が読みたい」と言われる回数も増えました。

先生方に「急な『読書の時間』にもご利用ください」と声をかければ「次の時間あいてますか」と、授業での図書館利用回数が1.3倍、貸出冊数は1.6倍に増えました。授業で来館するというきっかけがあると、生徒は図書館に足が向くようになります。『映画化された本』『看護系に進む人へ』『山田悠介』『王様ゲーム』などのコーナーが人気で、休み時間のたびに図書館に来る生徒も増えました。

本の表紙に語らせる展示も、本と生徒が出会う大切なきっかけです。『文化祭どうする?』の展示では、3年に1度の文化祭のイメージがわからない生徒たちに、こんな本が役に立つよ、とアピールします。生徒たちが本を手手に企画をあれこれ相談する姿に、活力を得る学校司書です。

